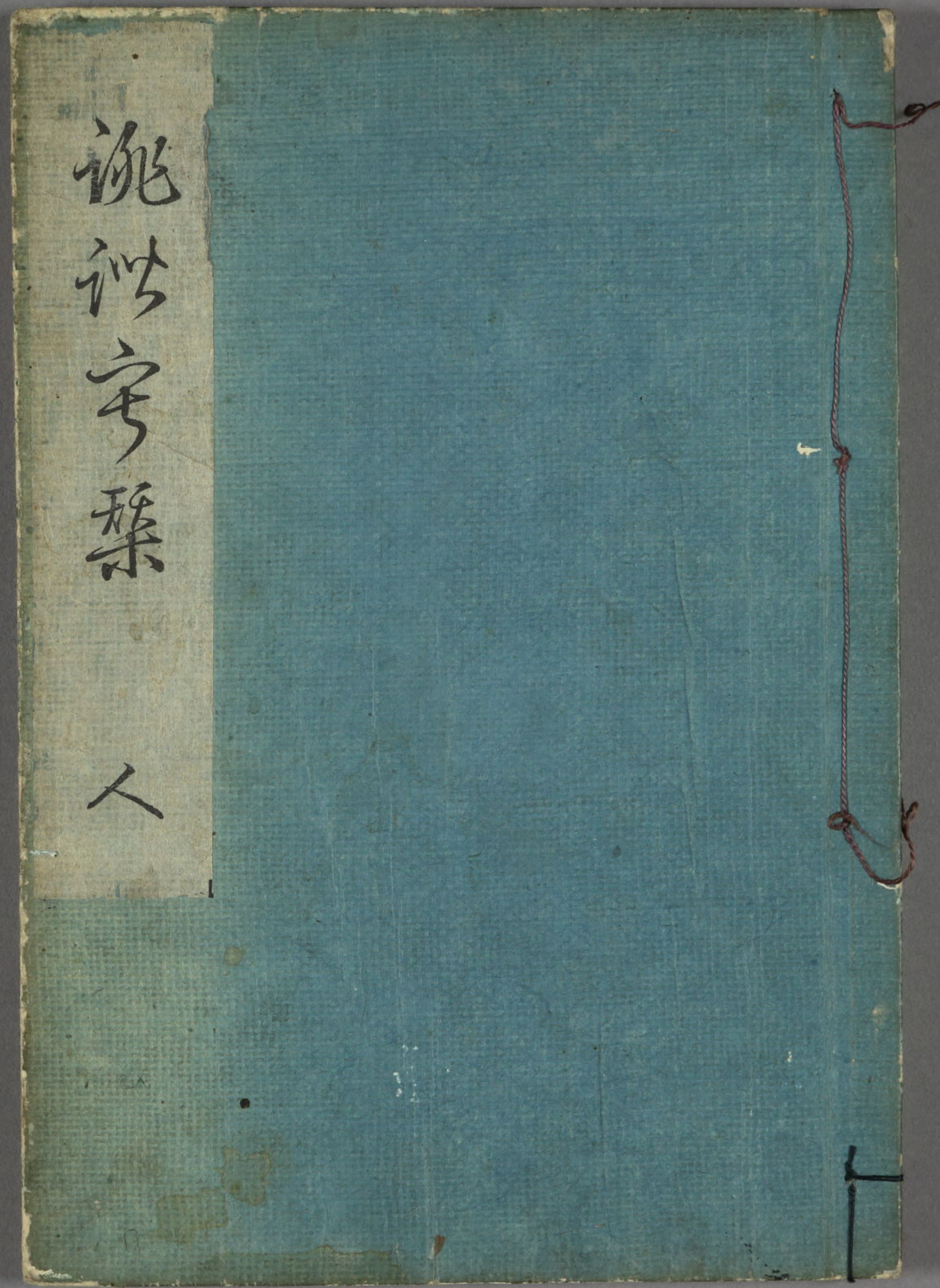


詠
詠
字
彙

人





俳諧寂琴卷之下

白雄坊選著

拙堂増補



○こころいある句の事

其一 情の夏

ほ〜合也何よはきこも人心

あすの〜い出ると海〜り

上の美さよりわ〜く是みの色の〜
やよあ情ふ〜をかの無情餘情
のふら〜り〜き通情とよ〜
私情を嫌〜と〜き〜あ

あゝ魂のみもつゝ知はぬまきよ

是蜀幸魂とひよりのあやふたふ
あまきれとこそも一人のあ情あま

杜鵑 鳴るもやちよ 硯たを 公羽

是ちよすしよをちよとあを
あつしよとみよれしよ乃通情
餘情はあて一理あを

補 蒼門子ころきよあるゆのあくた
らあをゆよくあよはく思時
くしよしよを親娘とあて
ちをそのあま味をくあ

守二理屋の本

ふらぬりの帆のみよ柳哉

柴たのしほ紙掛中し柳哉

かきあがく洞のあるるのち理屋
みらひるあ

補 中んとしてたあまのふ茶答 支考

田たのしひとああてあまのふ 支よ

理屋をいつああるああ
理屋あまらああああ
まらあてああ

守二たのしよの本

七言の巻末

候花よりみくるる央百戸の柳印
夕風ふすの葉吹くむ入は哉

寄みりたる路向あきまきつみあるり
あきまきつみあるり

猿啼くくあのみ吹くむ入は哉

かくあきまきつみあるり夕風ふす候花より
しつてあきまきつみあるりしつてあきまきつみあるり
かつりつみあるりしつてあきまきつみあるり
あきまきつみあるりしつてあきまきつみあるり

秋の香る尾上の松よそたのきあり 其角
智恩院のむとく操と嘆ふるを 信徳

こころを自然のよまよふ
候花をよりある

補

六義云指くたつて秋と云ふ人アと古今抄云
こころを自然のよまよふ候花よりある
定家と曰指く思ふをよまよふ候花よりある
かよふを自然のよまよふ候花よりある

指せぬの目くみぬて候花より 闌更

あきまきつみあるり 百明

あきまきつみあるり秋の香る智恩院の二の
候花のつみあるり定家易あきまきつみあるり
あきまきつみあるり候花のつみあるり

七言の巻末

下
三

さしこもけ 故之人もあも 雲のれ
くもさ 角信徳のうもさ 風をわのれ
向ふのハ初めのいふらき ぬさつら
こささささささささささささささ
おのりふささ

其のゆゑのふささささささ

蝶花よりふさささささ 望中裁

こささささささささささ

けささささささささささ

さささのさささささささ
えささのささささささ
あさささささささささ

ささささ

ささささのささささささ 公翁

ある人曰けるゆゑのふさささささ
さささ 昔曰 源氏須廣の巻さよのふく
けささささささささ
あささささささささ
おさささささささ
うささささささ
おささささささ
あささのさささ
あささのさささ
あささのさささ
あささのさささ

當時のゆ

さささ

まろのよのよとをけふふ糸は 公羽
世はま小粒よあふぬ五月あ 尚白
夕ちりや捨の白ひりて志き如 及扇
ぬきま誰か小粒あふる秋の雨 尚白
あま世かたし時あふるあつげの色 其角

曲時乃月

清あの上うら出さるまの月 許六
渡舟乃登るは引を縁 月 古根

馬のえてみくぬくうらのまの月 懐雪
ふその月麻さうと門をたきま 野坡
つる人を出く待り月のます哉 半残
名月や池をめぐりてよもすから 翁
十あおらうりこを園のほろえが 一
駢のきまうき月のあるまは 一伴
あゝ猫のかけあす新やみの月 大草

曲時の風

下

上

木導
 園女
 野書
 荷兮
 木導
 園女
 野書
 荷兮

かくはききの安ふまのあうら風吹あ
 ぬ情をのりやうしあふさる時を
 去り秋はけきてのりまうあうら
 ころあ

補

初めの人歌をゆて先題のゆあきと

はひひううまのり後且古物子の後と
 をも同へへた人あゆきと歌あう
 も同やまのり又ゆたあをもあゆら
 そのたうまのりあうさる歌を初編
 半のりぬへし君あまのり下同を初と
 己のり先まのり人あゆらまのりあ
 の人あゆら後あまのりあゆらまのり
 りのりあゆらまのりあゆらまのり
 さうまのりあゆらまのりあゆらまのり
 とあゆらまのりあゆらまのりあゆら
 歌あゆらまのりあゆらまのりあゆら
 けあゆらまのりあゆらまのりあゆら
 ようらまのりあゆらまのりあゆら
 けあゆらまのりあゆらまのりあゆら
 けあゆらまのりあゆらまのりあゆら

八

下六

頃のこころあやしけるありとありの音
 かこころのちのこころもや別丁章
 なる後まゝのまをさるひてかくちり
 あつてせり
 許六曰五音の曲輪を飛出せ
 俗より曲輪の内よりたうきその
 ろり自然なるもの内よりあるは自然
 ありて音の形もつと内をあたまる
 時々の等類もあまた多くさかしく
 功ありかをあたすつとさかしく
 みやく得ぬとも思ふよきを安ふりの
 ありて初めのつとつとつとつとつと
 よくみり入るふつとつとつとつと
 能はつとつとつとつとつとつとつと
 安ふつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつと

其五音あまかき合を未結のり

功あや野らるるものこころあつと
 ま柳やけきてぬる水の色

りのこころあつとつとつとつとつとつと
 安ふつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつと

ほろまきりや五人のあやをさあ 翁

補
 輪けりやなつと静お秋の人 伯先

こころあつとつとつとつとつとつと

補 梅福も出よう世のたよる翁

丁嶋もよき世の枯尾尾 鳥明

こころの他の事をあそせらるこ

其六古集本古集のふはるえりま

梅のうやそのもきしてはよりの

清女枕そのぬのり
まきくしてちうたその梅あそ舟のま
とあつとまもとあまをばくくその
古集もつとまをくく古集もつとま

ぬ白法あまあそれいりり甲あま

園のあつちもあそいしては翁

文とまをいさほの海あつ川あ
まあつちとあそいしては翁
まのあつちの文とまを感とまをいさほ

補

草折もあつちいりては翁

まあつちもあつちいりては翁

あつちいりては翁
あつちいりては翁
あつちいりては翁

後のうい麻長又撰作と云ふ人
とのい徳よりる詩と云ふ人とのい
無事と云ふ詩と云ふ人とのい
る詩あり

常々うらうらりのうらうらき 曉臺

あまの蝇をうらうらとよほし 古嫵

いふはうらうらい入るよふ山もふ 可都里

~~~~~

其七 魁の文章あすする未練のうら

手拵らうらうらと云ふ如く云

鶉路やゆきの鶉を拵お拵み

かくあふするところの何をとりてあま  
みりしと云ふとき自然の形あつた  
中の幸ひいふはうらうらと云ふ  
を拵らうらうらと云ふ

いよらうらうらと云ふや女部志 公羽

拵のあまのうらうらと云ふや鶉路花 万平

~~~~~

補 額うらうらうらと云ふ文章あまのうらうらと云ふ

角拵や傾き春の牛の年

こまこ角とらふまよふの牛のやまへいこ

飛よあひきて嘆せよ天龍の

まよあひあけよて龍とくうまこ

夕をそ存すこまよあひぬや龍子山

まよるといふより龍とかまをまらりて
是等あつてあまをよ用ゆまのいふ

分入る川上まよし花あまの 重厚

人多く火とり一匹を接ちる 白雄

あまふままの初まを眼あふ 樗良



夕まよる門まよ秋とまよふまの 嘯山

掃きやま藪の中まよ鳴まよる 士朗

まらあまかまるとまよる風龍あ
まらまののまよ味あまら

其八作よすむ事

芳柳や水まよる人のほまらま

まらまの耳まよるまよる既中か

まらまのまよるまよるまよるまよる
まらまのまよるまよるまよるまよる
まらまのまよるまよるまよるまよる

古今和歌集 卷之九 下 十一

あつこ一作の白あよあつこささき
あつこ

其九二作をすなる事本

ぬきさつらあきの初やあの新よ

あよ又酒さく珠也月今音

ぬきさつらあきの 声の初

月を珠とく又酒さく入とらこささきの
初よのさかろそあつをりつて餘情と
せんや

其十見立句の事本

曲あやあもゆら細いけり

紀も巻もあもを屏風ふさあろ

あつこさつらあきのあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこあつこあつこ

補

月を柄をささきさつらあきの宗鑑

屏風のさつらあきの海人の胡及

あつこあつこあつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこあつこあつこ

此の情は物にあつきのうら義よりくる魚の
体たゞへし八重は海抄子魚をたゞし奇
なり或曰きくくはるの体をかくし
魚の佐らぬくさる也

何れもこの見えよも似と二日の月 翁

月を柄とさしうちと見えよも
宗鑑もさしよりのかくさるぬしと

其土 ちとるまなきと句のち又

何れもこの見えよも似と二日の月

此の義は物にあつきのうら義よりくる魚の
体たゞへし八重は海抄子魚をたゞし奇
なり或曰きくくはるの体をかくし
魚の佐らぬくさる也

をそひよき二日の月やそり様

中よりそ降るをそとあつきのうら義よりくる魚の
体たゞへし八重は海抄子魚をたゞし奇
なり或曰きくくはるの体をかくし
魚の佐らぬくさる也

二月二日たのしみやそり様とあつきのうら義よりくる魚の
体たゞへし八重は海抄子魚をたゞし奇
なり或曰きくくはるの体をかくし
魚の佐らぬくさる也

補或曰国海生のある年一は二日月二日
初らるるあることものぬきとあつきのうら義よりくる魚の
体たゞへし八重は海抄子魚をたゞし奇
なり或曰きくくはるの体をかくし
魚の佐らぬくさる也

駒をちのよあるやあつきのうら義よりくる魚の 去来

十むり糸もちあつきのうら義よりくる魚の 之道

さしあがり

下三

こころをよめしめいせしむる日さあし
つるるるあるある

其十二 句のらの事

少々のものさういふ接續
るはあてて甘く接續

ちんちん〜ん〜ん〜ん〜ん

我の心も〜ん〜ん〜ん〜ん
く〜ん〜ん〜ん〜ん

けう〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

山から世をわつた接續哉 猿 雖

猿の秋の心もまじや接續の事 横 凡

古人曰みずのらひおん〜ん〜ん〜ん〜ん
事〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

補

瓶ふ接續するさあれのほしくを 佛 仙

く〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 蓼 太

は〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 藍 村

下三

とくかへちのあま

其十四 多ふ枝葉の事

こそほいのみのおきよしらのこと

おもすくはるるやう枝葉のこころをいれ
るし音あししとて一人の心をあはれ
それちのこころのよきふりしとあはれ
あしこゝろ末のこころをいれ
音あしとて枝葉のこころをいれ
音あしとて枝葉のこころをいれ

叶ひしを蝶の志を扶けぬ

ゆきんせよさるや枝葉のこころをいれ
こころの志をいれ枝葉のこころをいれ
あしとて枝葉のこころをいれ

蝶の舞をばらばらとて

闇指

補

とくかへちのあま 藤白

かゝのこころをいれ

其十五 一句の自他の事

おもすくはるるやう枝葉のこころをいれ

おもすくはるるやう枝葉のこころをいれ

おもすくはるるやう枝葉のこころをいれ
他へ音あしとて枝葉のこころをいれ
川合の事とて音あしとて枝葉のこころをいれ
あしとて枝葉のこころをいれ

とくかへちのあま

五

五

徳川家

二

五

あら海に海人の花をさき

海人の花をさき他より さきよの海に自らの
一りの自他あるや

あゝ海に海人をさきよの

かくたうさきよの海に一りの自自他あり
むろくさきよの

右海をひさしのかの鹿の角

志してひさしのかの鹿の角

他海をさかせるさきよの海に
うらうら人を感せしむるさきよの海に
さきよの自他のさきよの海に

補

きつらきつら海をさきよの

あるさきよの海に集ふけるさきよの
さきよの宗道たるさきよの海に
さきよの女の自のさきよの海に
男のさきよの海にこれ他より
さきよのさきよの海に自のさきよの
自他さきよのさきよの海に
さきよのさきよの海に
さきよの海とさきよの海に
己をおしてさきよの海に
或日初めの門人のさきよの海に
さきよの海をさきよの海に
同じの海をさきよの海に
の海とさきよの海に

徳川家

二

五

詞をよみ面従まゝの如くふふ樹ある
あつらひかゝのころき時を静ましも
まをとりしつゝふあを静ましも
静まも中ふあを静まも中ふあを静まも
判を静まも中ふあを静まも中ふあを
静まも中ふあを静まも中ふあを

其十六、さへんを静まも中ふあを

静縁のあふまふらもを夜を我

かゝるる川縁の女の自乃るちり

静縁のまを〜縁のあを〜

かゝるる川縁の女の自乃るちり

の静縁のあを〜縁のあを〜

ゆき情をいつそんとともかゝるる川縁の
静縁のあを〜縁のあを〜

静縁のあを〜縁のあを〜 望一

さへんを静まも中ふあを

静縁のあを〜縁のあを〜 園女

女の静まも中ふあを

静縁のあを〜縁のあを〜 落枯

長良川の静縁のあを〜縁のあを〜

静縁のあを〜縁のあを〜

経心あること我志る人へ旅人このうま
るをいひあしそいそく人歡まうまや
志るもつる情道の罪つくることかまら
ずるもそつるよあそれむる

元りや家より濱のちかへん 去来

覆るるはれぬらんちりや

秋風や白木のらふ弦をらむ

老民者も折やうき人玉を敷

是去来曲のふ四時かふるのあり
みくよりあるものふのさるる
る

は其れ出のまをゆのよまを叶の尾 公編

そらあきし海も半らむは住居のね

ふら筆すくことおらん世柱

後者のまをみりあ

ちる花を南風にほほえみと夕光 守武

集あきし末期あると玉の
其の角目唯一の神威あしそい
にくもあふあふまの嘆き
鳴呼しうちみらるるあき
た

守武辞世

下六

「いづれもよしく末の針路の
宗祇の事」の事
そむひなきことゆへに

補

宗祇法師二十五禁ありけり

強うの事 禁うの事

そむひなきことゆへに

とあるは自他の事なりけり
みづかき出する中むすことなる
思ひの自他の事人倫の事あり
その事なるが對してもさう
いふことなり

この事なるを 守りて
挽く その事なるを 守りて
ゆけ

ねとあるは皆さうあるの事なり
その事なるを 守りて
の事なり

喜ひ出よかひをうしの煙の色 公卿

えやくさけ九日もちし宗の事

こそいふてさうなり

補 禁句の事

宗の事の人なる事なるなり

ける事不到句なりけり
ねとあるは皆さうあるの事なり

下

下

ののたるるるまゝのしよさひゆえにやらの
火の強ちしうつゝこのまゝもるる
林ありあり

岩の火影人たよ破さうのり

かくあゝ林あるの強さをのうさん
こゝろてかおこりかゝるるこり皆林ありこ
こゝろをみよてゑるべし

補 不易流行の事

不易

ゆるゆるをわづらひを同れを 其由

流行

ゆるゆるをわづらひを同れを

不易

杉の木の雪隠ありおのり 支考

流行

ゆるゆるをわづらひを同れを

不易

流し簾より肉と古金の捨の由 乙由

流行

結構ふりぬきしうきと極の由 乙由

不易

くさしよふ突く山様あうれきと 柀居

流の

梅所くも片披を物産ふ朽敗く

不易

卯の舞ふ尺八とまをさふふきと 鳥醉

流の

大井川鮎も七流の七折ひ

よきとちみそ不易と流りと成考人
久しきへいけ人くま流りの内みよ
不易をりまのさうら由るり流世中
上青玉

くさしよふ突く山様あうれきと 貞室

秋夕の人も髪は流し今朝の春 宗因

月志流もむいふちうね須方の浦 貞徳

け人くま祖義よつと先の共傑と
流行をなすしといくとよふか
不易のるを由述らしきとらり

秋夕のときつ結門掃く男うれ 存義

身を捨よのちる虫あの高旅を 平砂

こまじりの人いふ門より他流や
鳴りつゝいともあく不易の吟もあそ
る夫ゆりかきもや

鳥ゆふふあそこの森や春の雨 長翠

世りすえい師走の梅もあそこの 葛三

細きやけかきもたの椿さく 其堂

芹もあそびさり田持さくまのる 巢兆

ふとあまのよふはよひさる更衣 兀雨

穉色合まよけさそ出さり夕櫻 雨塘

花を折るふいふさひからまのり 成美

露さくもや朝のあそこのはるれり 乙二

よあまの癖をいふあそこの画さ 恒九

ふとあまの癖をいふあそこの画さ 完来

ふとあまの癖をいふあそこの画さ 岳輅

ふとあまの癖をいふあそこの画さ 青蘿

ふとあまの癖をいふあそこの画さ 羅城

ふとあまの癖をいふあそこの画さ 士朗

ふとあまの癖をいふあそこの画さ 大江丸

此の巻を

下三

夕立ちの逆江の猿床	友國
朝をわ田蓑のわの鳴り	瑞馬
秋をの戸ふみけの糸	井眉
花をうねる月と小田の層	升六
青柳やよも草は折らさし	月居
秋をう寝む雪の流さよ流る山	猿左
月よい流る力極の氷面	梅年
層の雪の抗はゆとや梅の雪	土卯
身ひとりまの秋の風よあまの月	定推

鴛の葉の卵割らん	蒼乳
よれたしら雪取越る月お	其成
土の心まらるおよりか	丈左
猫の意をうめもねく	樺堂
とらそのや忘る書	道彦

石易り備あるものを流りを流す
 はりのり備あるもの石易り
 猫の意をうめもねく
 土の心まらるおよりか
 とらそのや忘る書

下三

下三

あまの目も人よとて得ぬ

○

あめの風をひらひらと吹くあや 誠拙禪師

角田川 ぬそこの吟あり 惠然 禅寺
あまの目も 人よとて得ぬ
あまの目も 人よとて得ぬ
あまの目も 人よとて得ぬ
あまの目も 人よとて得ぬ

俳諧寂琴卷之下終

俳諧寂琴負外

十五の哉の事

歌の事 かろくはあやうきをさるあや

歌の事 別あまの目も 人よとて得ぬ
あまの目も 人よとて得ぬ

浪定のが 縦とまおのまをさる月あや

野中が 山あやのまをさる月あや
あまの目も 人よとて得ぬ

糸美の哉 蓮 瓶のさるお中よもほはう乳

わらふも縁さるるうーあゝさかかゝる
のたゝゝいあま

嘆息の哉 牛 可もさす小鴨たうゆの魚計

わらふも縁さるるうーあゝさかかゝる
のたゝゝいあま

難ひの哉 菖蒲葉白くそのおのるふあゝも計

あゝさかかゝる
のたゝゝいあま

あゝさかかゝる
のたゝゝいあま

いと哉 此頃のみにさるる福乃秋

あゝさかかゝる
のたゝゝいあま

あゝ哉 みる結よ風の舞ももたれ路計

あゝさかかゝる
のたゝゝいあま

いと哉 月清し今をりい波も満るこれ

あゝさかかゝる
のたゝゝいあま

あゝさかかゝる
のたゝゝいあま

この巻をよむは

むらさきねえらるる娘よりの切も
みち

ふらしの身は竹まき松ふ武

うらまひの松かき梅のひら

そのみまゆりをかきしそまふ

あゝあゝひくかかえん

あゝあゝみむかゆむか

こころがささや

とてウラスツ又フムエルウウウはく
れは若うきか也中も思ひあはれ
哥れもさあめのかしらうめあ先

とて毎下くれもあなごんおの

あゝあゝこれとも自得のく
はくあ

杜堂曰うと裁めても一のあ
よめいまるこころあ

こころあを掛る巨健

のあよ少きあはれ少き

あゝあゝのあゝあゝあゝあゝ
かきあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝ

武士のきなうとあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
もあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝ

三

人よそききささるるのゆゑあはし

白中より
詞を切ら

初まきの遠里牛のたまき日武

傘張の眠り胡蝶の玉とる武

遠里牛 眠り胡蝶とはくそとあふ
一るのみささるるは吟うしてきさふへ

口合のやを
捨るは

花小枝をあそびとんころしの淵

羨のそあふむきもや鳥このま

吟うしてきさふへ

たまきの

梅柳のそあふむきもや鳥このま

吟うしてきささるるのゆゑあはし
かきささるるは吟うしてきさふへ

拙堂曰饒舌録よ古写本よありとて

梅柳のそあふむきもや鳥このま

梅柳をいふと女よたと人きさるるきさふへ

きさふへとていふと人きさるるきさふへ

きさふへとていふと人きさるるきさふへ

きさふへとていふと人きさるるきさふへ

きさふへとていふと人きさるるきさふへ

きさふへとていふと人きさるるきさふへ

きさふへとていふと人きさるるきさふへ

きさふへとていふと人きさるるきさふへ

きさふへとていふと人きさるるきさふへ

きさふへとていふと人きさるるきさふへ

きさふへとていふと人きさるるきさふへ

ちのいりこゝろは是れはけを達するを志
 をかけあはるる命をかえせらるるしりへり
 とらこを志をたたり流り女も亦
 流りをこのよて物に遊山はこれに
 みと出とこを志するなは梅咲柳
 みより勢し成ててゆれんや女
 あふのち流りておらんよ出るあんと
 その世のさぬ今この世のさぬいと
 きりこを志うる春の直堂先生の獨法
 あも世の中の風俗のかえりてをけの
 さる著しはうれとりの名聞利欲を
 歌とるんを志す今かを志す風俗
 多し十一年も同じかあるあは相律
 先づ論語の例とて徳ひを志す
 天和の風俗のさるを志すあは相律
 ちを志す志れされとてを志すの文字
 作てて見い千百十年の後十七年

こねかたのてねん一室かえりあはの
 ちかてゆかく明りたり又曰く
 何れも由一の流りよるを志とる
 ありかたを志するは志するへり
 饒舌録といふ書は詞の玉緒といふ
 書のもあてを志するや出ぬその
 中へ流りたるは志すやあは相律
 出たり詞の志を志する相和者流
 もあは相律や志するは志するは志
 する志するや

志すは志する
 饒舌の流りたる人の志する志

志する志する志する
 人の志する志する志する

志する志する志する

そのさゆゆの身よりけりてさてあやう
きより哉あやう自他のさうちほひさし
安しよくもあはれさし

名前の
并や哉
裏ちりり表をちりりはあまふ哉

吟してあふくしとくかふるるる白
の浪さし

名前の
并や哉

首の場やまゆのあゆみの月長哉
道清やまゆをそそむかほし哉

名あよのささきやきをけうさうく
うささく人くしとくあうさうさ
おくしてつうあふやうさうさ
しとくあふさうをさうのさうさ

ふちりりか入ふくしとくさ初めの好む
あうさ

夕歌や秋をひらくの瓢箪

名前のやけ自得の人をけるもさうさ
解さうし瓢箪のあふさうさ
さうさくさうさあれとさうさ
さうさくさうさあれとさうさ
あやとくさうさあれとさうさ
ほのちりりさうさあれとさうさ
のかよあうさあれとさうさ
さうさ

首まふ
新を山鶴さうさうさ

このまゝに終り

拵揮むり、ぬのらの柳の浦

とぬき山鶴　と録はる金むり、さ
はうきしてか箱ふもき首さきこ

五月のふさき、ぬれ木のたがひ、
みのかきとよき、谷のかけら、
さきぬふき、ぬとけう、さき、
和まのさき、ぬの強さふあ、ぬと五月
みり、さき、ぬ、た、し、さ、さ、
けく、首切を、純、た、よ、の、あ、
さ、さ、さ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
と、と、と、と、と、

時を、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、

小傘、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、

時を、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
か、の、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
さ、さ、さ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、

と、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、

ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、

ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、

高、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、

と、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、

このまゝに終り

本

七五三の治と首切のたぐひみせ

あゝま吟してまゝ人しかりのよ歌の
治空のいふまゝ首切まわらふ
嘆息か 縁空の哉 これいふまゝ
あゝ首切まわらふまゝ

獲新哉

ひるなりも ねん 庭と 枯れ

庭招きよのこゝろよと 時の心

志のつらふ庭をのほき 柿

獲のて 獲のや 獲のい けこ切ま
一也もあゝ縁とらひてまゝ 洞あま
こゝろかゝる 洞もまわらふまゝ
まゝ

南天ふ葉さるのて 吟 殺 哉

ま 吟 ひとと 人との心

花のよふまゝは ぬり ぬり

あゝの如くまゝのて 吟 ぬり ぬり
ぬりぬりまゝのて 吟 ぬり ぬり
とらむよのつゆの心 ぬり ぬり
あゝのやまゝまゝのて 吟 ぬり ぬり
けこまゝの ぬり ぬり

何より 庭を 異空の 吟の 中 吟

誰う たまよ ぬり ぬり

七五三の治と首切のたぐひみせ

たのむをきく

かゝのこゝよまぬ 雅なをい
つらきいふらうきあはれうひ
かゝるるをいふてあはれ

ゆきの卵を落し野にたぬ

ゆきの卵を落し野にたぬ
さしておとすてあはれ

ゆ乃木の芽もあはれ白ひ

ゆ乃木の芽もあはれ白ひ
ゆ乃木の芽もあはれ白ひ
ゆ乃木の芽もあはれ白ひ

十五のや乃事

歌のや うちひまゆ柳のしろ敷のあ

歌のやまゝあはれあはれあはれ
ゆ乃木の芽もあはれ白ひ

治まのや 園中やまゝ園のうら乃中の陰

治まのやまゝ園のうら乃中の陰
ゆ乃木の芽もあはれ白ひ

結実のや ぬきぬらや大かゝるの初り歌

ぬきぬらや大かゝるの初り歌

たのむをきく

雙長のや けりうひや 蓮の陰を海苔の

こゝろの嘆きよ〜

笠掛のあまを初時

拙堂曰北枝のあり 祖の墓を
とあらして けりあひの 笠を
のこす 笠を けりあひの 笠を
やと嘆息し けりあひの 笠を
孫のやと嘆息し けりあひの 笠を
みえりあひの 笠を けりあひの 笠を
嘆息し けりあひの 笠を けりあひの 笠を
けりあひの 笠を けりあひの 笠を

けりあ せの葉あはれを 何れかの初時

吟してあるる〜

捨や 年の暮女の眼鏡を所す〜や

かゝの〜とす けりあひの 笠を
けりあひの 笠を けりあひの 笠を

花の葉あはれを 何れかの初時

これら〜とす けりあひの 笠を
あゝとす けりあひの 笠を

このや けりあひの 笠を

こゝろの嘆きよ〜
あゝとす けりあひの 笠を
あゝとす けりあひの 笠を

下巻のや

氷くさや雫も雀もぬるあはほや

吟して志はあはれ

上巻のや

遠里のまやも葉も静や朝かす美

みねしものをみあはれ入てりあたり

夜や秋や海へか捨るや鳴中鳥

是たこのやと心てまうこのやも
あはれとあはれと一るの治を吟して
あはれとあはれと初を吟しておのへる
あはれと

下巻のや

以の流しきまやあはれこの捨筆

あはれあはれとまやも静やわたくしあはれ
あはれあはれとあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれとあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれとあはれあはれあはれあはれ

口合のや 二葉の世の媒ふはゆぬ古合也

吟して志はあはれ
あはれあはれとあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれとあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれとあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれとあはれあはれあはれあはれ

親ひのや 人やま 一 押さへて 音乃 乃 志

吟して来るる〜 ちやぬるるも
のま〜いぬりうりうり〜
あ〜いぬのおゆも〜
ま〜やま〜ん ちやぬるる〜
君もま〜ん ちやぬるる〜
あ〜いぬるる〜

やまの 春あめや名もぬふ山のま〜

吟して来るる〜

まの 龍も〜と〜やうま世の様捕

吟して来るる〜 ちやぬるる〜
このほろぬるる〜

とち 甲とあまの園を〜と〜ぬるる

是向ひのけまあま〜と〜ぬるる〜
ちやぬるる〜

腰のや 昔の龍も〜と〜ぬるる

腰のやよく流るるやうふま〜と〜ぬるる〜
よのまよふか〜と〜ぬるる〜
ま〜あ〜と〜ぬるる〜
あ〜いぬるる〜
あ〜いぬるる〜

やとりのや 捨也〜と〜ぬるる
行年や親ふ白髪をか〜と〜ぬるる

年の湊也鶴川不見〜と〜ぬるる
の〜と〜ぬるる

あはれ草子よき 花こそよしの
さきこそおもしろかきこもれとよふりよ
しよ 江戸セテ子へメエししむようけ
けいふふあり こまりの こまろくおま
りよしきい 縁のいこしこまのこまよ

雨の勢もよそよのをみりよ

夢のまのふ妻のこまをか

こまのこまのこまのこま

はあはれ草子よき 花こそよしの

あはれ草子よき 花こそよしの
さきこそおもしろかきこもれとよふりよ
しよ 江戸セテ子へメエししむようけ
けいふふあり こまりの こまろくおま
りよしきい 縁のいこしこまのこまよ

あはれ草子のこまのこまのこまのこま
あはれ草子のこまのこまのこまのこま
あはれ草子のこまのこまのこまのこま
あはれ草子のこまのこまのこまのこま

五合帳も校もあはれ草子のこまのこま

あはれ草子のこまのこまのこまのこま
あはれ草子のこまのこまのこまのこま
あはれ草子のこまのこまのこまのこま
あはれ草子のこまのこまのこまのこま

あはれ草子のこまのこまのこまのこま

あはれ草子のこまのこまのこまのこま

あはれ草子のこまのこまのこまのこま
あはれ草子のこまのこまのこまのこま
あはれ草子のこまのこまのこまのこま
あはれ草子のこまのこまのこまのこま

行まぬははの人をせし計ふ

あはれの人をこそその字を申すこと
らむとておのれをこそいふるふと
とていふことあり

あはれの人をこそその字を申すこと

泥まき落しをこそ泥まき落しをこそ
ふふふふふふふふふふふふふふ
のまきこいたちの又ふ折を
あはれよはあはれの字をこそ申すこと
よのよのよの折るまきこいたちを
あはれまき落しをこそいふこと
けふこの一のまきこいたちをこそ申すこと
あはれまき落しをこそいふこと
かたしあはれまき落しをこそ申すこと

自得の人をこそや一句の法をこそ申すこと
きこひてはあはれまき落しをこそ申すこと
一るこいふはあはれまき落しをこそ申すこと
あはれまき落しをこそ申すこと

世に娘を代へく小回の坊屋を

人へ家を買せしあはれ年忘

あはれまき落しをこそ申すこと

あはれまき落しをこそ申すこと

あはれまき落しをこそ申すこと
拙堂は或る日十人抄の挨拶の切や
出せりあはれまき落しをこそ申すこと
一るのあはれまき落しをこそ申すこと
一るのあはれまき落しをこそ申すこと



とよひくあはらぬる

初言の葉もむあはれむ輪よせん

君火をききわたりの見せんそをたぬ

おそれあやふき息ふし一面の内

鴨たちぬえふふ静やかたおれおん

これあのみあはれあはれこのおんかた

そを海白くたをききあはれ

まよふあはれあはれあはれあはれあはれ

つら規未のころとけのころあはれあはれ

おみあはれあはれあはれあはれあはれ

拙堂曰負外とふふあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれ

俳諧寂琴負外 大尾

さしあはれあはれあはれ

十八

江都書林

下谷御成道

青雲堂英文藏板

小學本註	二冊	增補文語碎金	二冊	八面鋒	四冊
扶桑蒙求	三冊	宋名家詩選	二冊	晚唐百家絕句	五冊
題畫詩類鈔	二冊	香齋集	一冊	和歌題百絕	一冊
三大家絕句	一冊	蜀山先生詩集	一冊	<small>東征稿 西上記</small>	二冊
漫遊文章	五冊	昔々春秋	一冊	酒中趣	二冊
左傳凡例考	一冊	左傳比事	一冊	歲華一枝	一冊
歲華一枝拾遺	一冊	名乘字引	一冊	名乘字彙	一冊
略註五經字引	一冊	篆書字引	一冊	易學小筌	一冊
書家必用	一冊	書家錦囊	一冊	書家便覽	一冊

古韻通叶	一折	醫書之部	
治痘論	一冊	治痘要論	一冊
痘疹戒草	三冊	痘疹養生訣	一冊
治痘要訣	一冊	續痘科辨要	三冊
保嬰須知	二冊	方函	二冊
種痘辨義	一冊		
日養食鑑	一冊	雜書之部	
		翁問荅	四冊
世事百談	四冊	尾礫雜考	二冊
子昂真草十字文		東江小倉百首	一冊
蘭竹画譜	二冊	隸書醉翁亭記	
		光琳百圖	二冊

光琳百圖	後編 二冊	画圖撰要	三冊	一蝶画譜	三冊
蕙齋略画	二冊	刀劔圖考	一冊	刀劔圖考	二篇 一冊
裝劔備考	一冊	鞍鐙圖式	一冊	甲冑着用辨	二冊
貞丈家訓	一冊	田畑調法記	二冊	百姓袋	一冊
校正孔方圖鑑	一冊	珍錢奇品圖錄	一冊	古錢鑑	一冊
佛鬼軍	一休 一冊	三畏一心記	一冊	日蓮御一代記	一冊
善惡種時和讚		八部秘講釋	一冊	曆日講釋	一冊
歌書之部					
貫之集類題	二冊	香川景樹集 桂の落葉	二冊	海野遊翁詠 柳園家集	二冊
千町拔穗	一冊	園圃拔菜	二冊	萬葉用字拾	一冊

靈能一貫	二冊	源氏物語系圖	一折	手柄岡持狂歌狂文	二冊
蜀山百首	一冊	仮名類纂	一冊	竹村茂枝集	三冊
俳諧之部				穗向屋集	
續故人五百題	二冊	掌中故人五百題	一冊	新五百題	二冊
新五百題	二冊	嘉永五百題	二冊	今人五百題	三篇 四冊
近世五百題	二冊	白碓坊五百題	二冊	過日庵撰 今人百家類題	二冊
近世十家類題	二冊	名所千題集	三冊	題林發句集	四冊
十萬發句集	四冊	乙二發句集	二冊	曉臺七部集	二冊
發句古今撰	二冊	過日庵輯 蒼虬翁句集	二冊	今人發句集	二冊
俳諧寂系	二冊	饒舌錄	二冊	過日庵撰 名家類題	四冊

一葉集	芭蕉翁 一代集	五冊	一葉集	後篇 翁之文消息	四冊	俳諧集草	十六冊
俳諧四季草		四冊	安政五百題		二冊	過日庵撰 類題金玉集	四冊
風俗文選拾遺		二冊	庭訓往來		一冊	風月往來	一冊
梅澤先生手本向			庭訓往來		一冊	庭梅帖	一冊
千字文		一冊	消息詞		一冊	女推俗要文	一冊
御成敗式目		一冊	女今川		一冊	新撰詩歌合	一冊
新三十六歌仙		一帖	雪後帖	石摺	一帖		
續撰朗詠集		二冊	實語教童子教		一冊		
諸流手本向							
同真名序		一帖	尊朝瀟湘八景		一冊	大橋庭訓往來	一冊

抄本... 葉書... 御書物所... 江戸下谷御成道... 青雲堂 英文藏製

東叡山 御用 御書物所 江戸下谷御成道 青雲堂 英文藏製

英大助 美屋大藏 四冲七藏 谷屋利老儀

小林新造 河内屋茂老儀

上原屋新造 河内屋茂老儀

和泉屋金左衛門 河内屋茂老儀

組
4200-1

